



# 日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



撮影：小高 顕（日本経済新聞社写真部）

## 「緑の花」ずらり 正念場これから

東京都議選で小池都知事が率いた都民ファーストの会が圧勝、自民党が惨敗した。都民ファースト開票センターのボードには、当選確実を示す緑の花が次々と並んだ=7月2日 東京都新宿区

前文科事務次官会見に300人超え  
質問者の総数は22人にも

6月23日の前川喜平・前文部科学事務次官の会見は、クラブの10階ホールが記者とカメラマンで埋まった。その数、335人。参加者が300人を超えた。その会見は年に1回あるかないかだが、今年に入り、3月の石原慎太郎氏会見に次ぐ人数となった。

前川氏は、「前次官による官邸に対する内部告発」という前代未聞のニュースの主人公であり、メディア内部でも毀誉褒貶が飛び交っていた。そこで、各社編集幹部ら約30人からなり、ゲスト選考を担当する当クラブ企画委員会で、「クラブに呼び、本人にいろんな質問をぶつけてみよう」との声が上がり、実現した。

司会は、毎日新聞のベテラン政治記者、倉重篤郎企画委員。まず倉重委員がじっくり質問し、そのあと、会場から質問をとった。

「できるだけ多くの質問を受ける」というのが当初の方針。予定の1時間半が近くなってもかなりの手が挙がっていたが、倉重委員の機転で、その時点で挙手していた全員に立ってもらい、その人たちの質問は全て受け付けた。会場からの質問者総数は22人。質問者数の記録はないが、おそらくクラブ歴代1位ではないだろうか。終了したときには、開始から約2時間が経過していた。

会見中、当クラブのウェブサイトにはピーク時、1時間に約2万9千のアクセスがあり、各メディアによる会見動画アクセス総数は、翌日の時点ですでに15万を突破していた。

（土生修一）

# 今年の記者研修会は8月7日、8日 柏崎刈羽原発視察など新潟取材も

今年の記者研修会は8月7日（月）、8日（火）の両日、日本記者クラブで行われる。（プログラム別表）

研修会は今年で20回目。毎回、全国のメディア各社の中堅、若手記者たち70人前後が参加、多彩なゲストの話を聞き、社を横断する貴重な記者交流の場にもなっている。

日本記者クラブの活動を知ってもらうために、非会員のメディア各社にも参加を呼び掛けている。また今回は東京での研修会終了後、希望者を対象に、新潟に移動して原発取材なども企画している。

## 「防災とメディア」で各社討論

◇8月7日（月）  
研修の最初は、「ネット時代のジ

クラブゲスト 3  
板橋功・公共政策調査会研究センター長  
／バラグ・カンナ・シンガポール国立大  
公共政策大学院・上級研究員／高橋和夫・  
放送大教授、田中浩一郎・日本エネルギー  
経済研究所常務理事、中東研究センター長  
／根本かおる・国連広報センター所長／前  
原誠司・民進党「尊厳ある生活保障総合調  
査会」会長／高安雄一・大東文化大教授  
／道下徳成・政策研究大学院大教授

会見レポート 4・7  
小泉進次郎・衆議院議員／バルト3  
国駐日大使／アラン・カエタノ・フィ  
リピン外相／政党「香港衆志」幹部／  
津山恵子・在米ジャーナリスト／前川  
喜平・前文部科学事務次官／塩崎恭久・  
厚労相／権丈善一・慶応大教授

試写会  
「セールスマン」と主演女優会見 8  
会見余話 8  
第5期記者ゼミ 9  
ワーキングプレス 10・11  
欧州取材この1年  
予測不能な世界で変革の潮流を探る  
朝日新聞社 石合 力

獣医師偏在  
「加計学園問題」に思う 地方の現  
状に目を向けて  
宮崎日日新聞社 村永哲哉

新・列島報告 別府 12  
前代未聞の自治体プロモーション  
「湯～園地」計画は地方の希望とな  
るか 大分合同新聞社 田尻雅彦

被災地通信 気仙地方 13  
待望の中心商業施設開業 紙面展  
開もエールを込めて  
岩手日報社 長内亮介

書いた話書かなかった話 14・15  
マクロン登場に思う ジスカルデ  
スタンとの比較、ドロールとの類似  
伴野文夫

リレーエッセー 16  
企業の私物化を批判  
異例の大抜擢・山下俊彦さん  
伊藤裕造

寄稿 17  
ジャーナリストたちの連帯を  
D・ケイ教授の危機意識 音 好宏

マイBOOKマイPR 18  
第23期委員会名簿 19  
寄贈書 20

町の大西勝也町長の2人が「復興と  
防災」について対談する。

## 中国外交官との意見交換も

◇8月8日（火）

「ヤーナリズム」と題し、実名・匿名  
報道や個人情報保護法の事件報道へ  
の影響などについて、宍戸常寿・東  
大大学院教授が語る。

続いて、山口那津男・公明党代表  
が登場する。公明党は7月の都議選  
で、自民党ではなく都民ファースト  
と連携して話題になっただけに、代  
表の発言が注目される。

午後のパネルディスカッションは  
「防災・啓発とメディア」をテーマ  
に、河北新報、中日新聞、高知新聞、  
毎日放送の各記者が自社の取り組み  
を紹介しながら意見交換する。

引き続き、東日本大震災の被災地、  
宮城県気仙沼市の今川悟市議と、南  
海トラフ対策に取り組む高知県黒潮

ももある滝鼻卓雄・元読売新聞東京本  
社社長が「体験的ジャーナリズム論」  
を語る。滝鼻氏は、自らの記者経験  
をつづった『記者と権力』を出版した  
ばかり。昼食後は「トランプ政権と  
フェイクニュース」と題した平和博・  
朝日新聞記者の話、続いて中国大使  
館を訪問し、程永華大使会見（予定）  
や若手外交官たちと懇談する。最後  
は、九州新幹線や豪華列車「ななつ  
星」などで注目を集めるJR九州の  
青柳俊彦社長の話で締めくくる。

## 新潟取材団のみの参加も可

今年研修が終わった後、新潟取  
材団を企画している。参加対象は、  
研修参加者と研修非参加の会員各社

今年研修が終わった後、新潟取  
材団を企画している。参加対象は、  
研修参加者と研修非参加の会員各社

の現役記者。  
東京での研修会終了後、すぐに上  
越新幹線で新潟入り。翌9日に東電  
柏崎刈羽原発の構内を視察し、設楽  
親所長へのインタビュー、午後は新  
潟日報本社で県政の説明を受けた  
後、昨年10月に当選した米山隆一知  
事と会見する予定。  
もちろん、東京の研修会のみの方  
加も大歓迎。

参加申し込み、問い合わせは、日  
本記者クラブ事務局（電話03・3  
503・3766）へ。  
（専務理事 土生修一）

8月7日（月）	10:30~11:45	ネット時代のジャーナリズム 「実名・匿名報道や改正個人情報保護法施行後の事件報道への影響」 宍戸常寿・東京大学大学院教授
	12:30~13:30	記者会見 山口那津男・公明党代表
	14:00~15:45	パネルディスカッション「防災・啓発とメディア」 武田真一・河北新報社防災・教育室長／後藤厚三・中日新聞社社会部 デスク／石川浩之・高知新聞社地域読者局次長／亘佐和子・毎日放送 ラジオ局編成センター記者
	16:15~17:45	宮城県気仙沼市と高知県黒潮町の防災交流 「気仙沼市の復興と黒潮町の南海トラフ対策」 今川悟・気仙沼市議会議員／大西勝也・高知県黒潮町長
	18:00~19:30	交流会
8月8日（火）	10:15~11:30	「体験的ジャーナリズム論」 ジャーナリスト 滝鼻卓雄・元読売新聞東京本社社長
	12:15~13:30	「トランプ政権とフェイクニュース」 平和博・朝日新聞IT専門記者
	14:15~16:15	中国大使館訪問（程永華駐日大使の会見＝予定、若手外交官との懇談）
	17:00~18:00	記者会見 青柳俊彦・九州旅客鉄道（JR九州）社長



下記のゲストの会見レポートは  
4～7ページに掲載しています

**小泉 進次郎** 衆議院議員

■6・1(木) 記者会見/司会: 橋本五郎委員/出席: 183人

**バルト3国駐日大使**

ヤーク・レンスメント・エストニア大使  
ノールマンズ・ペンケ・ラトビア大使  
エグディユス・メイルーナス・リトアニア大使

■6・2(金) 記者会見/司会: 鶴原徹也委員/通訳: 秋山賛、宇尾真理子/出席: 56人

**アラン・カエタノ** フィリピン外相

■6・7(水) 記者会見/司会: 土生修一専務理事/通訳: 西村好美/出席: 65人

**香港政党デモシスト「香港衆志」幹部**

黄之鋒(ジョシュア・ウォン)香港衆志秘書長  
周庭(アグネス・チョウ)同常務委員

■6・15(木) 記者会見/司会: 坂東賢治委員/通訳: 池田薫/出席: 52人

**津山 恵子** 在米ジャーナリスト

■6・21(水) シリーズ企画「トランプ政権: 米国と世界の行方」⑩/司会: 杉田弘毅委員/出席: 72人

**前川 喜平** 前文科事務次官

■6・23(金) 記者会見/司会: 倉重篤郎委員/出席: 335人/会見詳録

**塩崎 恭久** 厚労相

■6・28(水) シリーズ企画「2025年ショック どうする医療・介護」①/司会: 竹田忠委員/出席: 83人

**権丈 善一** 慶応大学教授

■6・30(金) シリーズ企画「2025年ショック どうする医療・介護」②/司会: 竹田忠委員/出席: 65人

**高安 雄一** 大東文化大学教授



韓国社会の課題は「短期的には若年雇用、長期的には高齢化による財政悪化」。若年失業率は10%近いが「労組を基盤とする新政権が硬直的な労働市場を見直すのは難しい」。高齢化は2065年に40%を超え財政赤字のGDP比は160%にも。「財政破綻の可能性もある」

■6・22(木) 記者会見「文在寅政権と韓国社会」/司会: 山本勇二委員/出席: 51人

**道下 徳成** 政策研究大学院大学教授



「金正恩の指導者としての能力は父親より上」「米朝間の紛争は全面戦争にはならないが北朝鮮による韓国限定攻撃はあり得る」「朝鮮人民軍は破壊力を持つが機動力はない」「日本は、敵基地攻撃能力について落ち着いた議論を今からやるべき」

■6・23(金) シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」⑦/司会: 山本勇二委員/出席: 62人

**板橋 功** 公共政策調査会研究センター長



所属組織は警察庁のシンクタンクとして設立されたが「研究の独立は確保されており政府批判もする」。改正案には「共謀罪よりも国際組織犯罪防止条約締結のために必要」と主張。「テロ対策の名前は不可解。GPS捜査の法整備などテロ対策は別途やるべき」

■6・2(金) 研究会「組織犯罪処罰法改正案について」②/司会: 俣示文昭委員/出席: 25人

**パラグ・カンナ** シンガポール国立大学公共政策大学院・上級研究員



インド生まれ、ドバイ育ち、米英で高等教育を受けた国際派エリート。「相手との接続がなければ、相手に影響を与えられない」「現代の接続性とは、空路、鉄道、道路、パイプライン、サプライチェーンなど。日本は一带一路構想やAIIBへの『接続』が必要」

■6・6(火) 著者と語る『「接続性」の地政学: グローバリズムの先にある世界』/司会: 杉田弘毅委員/通訳: 宇尾真理子/出席: 35人

**高橋 和夫** 放送大学教授(右)

**田中 浩一郎** 日本エネルギー経済研究所常務理事  
中東研究センター長



「オバマ時代は、大統領補佐官など側近にイラン関係者がいた。トランプ周辺にはイランに憎悪を抱く米軍関係者が多い」(高橋)「イランは制裁時に協力的だった中国に恩義があるが、ガラクタを売りつけられた面もある。対中の基本は付き合うが頼らない」(田中)

■6・8(木) 記者会見「イラン情勢と米国の中東政策」/司会: 脇祐三前委員/出席: 58人

**根本 かおる** 国連広報センター所長



日本の難民問題を考える入門書的新書を上梓した。昨年、日本の難民認定申請者は1万人を超えたが、認定されたのはわずか28人。認定率はG7中、ダントツの最下位。「門番役」の法務省入国管理局が、難民審査を担当している点など制度の問題を指摘した。

■6・13(火) 著者と語る『難民鎖国ニッポンのゆくえ』/司会: 土生修一専務理事/出席: 42人

**前原 誠司** 民進党「尊厳ある生活保障総合調査会」会長



民進党の新しい生活保障関連政策の中間報告。生活者の不安解消と社会保障充実が柱。「経済成長依存は破綻した。『みんながみんなのために』の理念で増税をお願いする」。国民は痛みを伴うが「この道しかない」。覚悟を問われ「政治生命を懸ける」ときっぱり。

■6・16(金) 記者会見/司会: 川戸恵子委員/出席: 61人





## アララン・カエタノ

フィリピン外相

### 熱い国の冷静な外相

難航するミンダナオ和平、中国と利害が衝突する南シナ海の問題、過激派組織「イスラム国」(IS)に忠誠を誓う組織の台頭など、内外に課題が山積するフィリピン。カエタノ外相は5月、前任者の退任を受けて就任したばかりだ。



ドゥテルテ大統領と選挙中からタッグを組み、腹心といわれる。ドゥテルテ氏と言えは数々の直言、暴言で話題をさらう人物。さてカエタノ氏はどんな人なのか。日本記者クラブでの会見で見た姿は、意外にも冷静な外交官そのものだった。

国内に存在するISの規模を尋ねた質問には、5月23日に南部ミンダナオ島に出した戒厳令の必要性や、複数の組織が入り乱れる同島の状況を、まずは丁寧な説明。その上で、「実際に何人いるのかは不明」「通常と異

なり、部隊や戦車の数として把握できるものではない」などと慎重な回答に徹した。

独立闘争を長年にわたって続けたが、日本政府の仲介もあって2014年に和平合意に署名したモロ・イスラム解放戦線との和平プロセスの現状を尋ねる質問には、「日本の支援は辛抱強く、一貫性がある」「日本は懸け橋役だ」とホスト国への謝意を強調した。

南シナ海については、「フィリピンの領土は一步も譲らない」と前置きをした上で、領有権を主張する国はフィリピンと中国の他にもベトナム、マレーシア、ブルネイ、台湾と多いことを強調。フィリピンは東南アジア諸国連合(ASEAN)の今年の議長国で、「地域の平和と安定が最優先。中国への対決姿勢に出れば、他の国にも同じく対決姿勢を取らなければならない」とした。中国から多額の財政融資を取り付けて以来、権利の主張を控えるドゥテルテ氏への批判を意識した発言だ。

なるほど、奔放なトップにはカエタノ氏のような補佐役が必要だろう。そう感じた会見だった。

朝日新聞社国際報道部 神田 大介

## 政党「香港衆志」幹部

### 「本気で戦っていますか」

### 香港民主派の鋭い刃

香港行政長官選の民主化を求め、香港中枢を埋め尽くした黄色の傘、傘。ただでさえ蒸し暑い香港で、自らの手で民主を勝ち取ろうと路上に座り込み、演説する若者たちの熱気が渦巻いていた。3年弱前の「雨傘運動」の光景が、



まさまざと脳裏によみがえった。

日本記者クラブでの会見に臨んだ香港の政党「香港衆志」の周庭(アグネス・チョウ)常務委員(写真左)、黄之鋒(ジョシュア・ウオン)秘書長の舌鋒の鋭さは、いささかも衰えていなかった。2人とも香港返還前年の1996年生まれ。わずかに20歳の若者たちの政治意識の高さに驚き、皮肉にもそうした政治的成熟を生み出した、香港を揺さぶる中国の強権政治の闇の深さに改めて愕然とする。

「香港人の権利は侵害され、国際公約の『1国2制度』は、すでに『1

国1・5制度』にされてしまった」。黄氏は、香港基本法にも認められる香港の「高度な自治」が危機に瀕している実情を切々と訴えた。

女性常務委員の周さんが、独学でマスターした日本語で、特に日本の若者に訴えかけた言葉は胸に染みわた。「皆さんが持っている民主的な権利は香港人が持っているものではない。ぜひ、大切にしてほしい。そして不正義や不公正に気付いたら声を上げてほしい」

2人は、「民主は当たり前ものではなく、社会的道義と人権が到来していない社会では、それを勝ち取るために戦い続けて初めて変化を起こすことができる」と強調した。

雨傘運動では長官選の普通選挙という成果を勝ち取ることはできなかった。だが、香港衆志はひるまず、穏健な民主化運動を進め「私たちの自決権を獲得したい」と結んだ。

日本では会見当日、「共謀罪」法が成立した。数の力による横暴な政治を繰り返す日本の政権。「本気で戦っていますか」。香港民主派の若い2人の会見は、日本のジャーナリズムにそう問いかけるような、鋭い刃にも感じられた。

中日新聞・東京新聞論説委員

加藤 直人

## 津山 恵子

在米ジャーナリスト

### 他人事ではない 米メディアの苦境

ニューヨークに住んで14年になる  
そうだ。トランプ政権のドタバタぶ  
りは日本でも詳しく報道されている  
が、肌感覚までは住民でないとなか  
なかわからない。そのギャップを埋  
めるのに、最適な会見だった。



外国人の配  
偶者を持つ米  
国人はツイッ  
ターなどのソ  
ーシャル・ネ  
ットワーキン  
グ・サービス  
(SNS)の使  
用を控え始め  
ている――。

近所に日本人妻の知り合いがたくさ  
んいるからこそ仕込める話題であ  
る。

で、なぜか。SNSには反トラン  
プのツイートがあふれている。うか  
つに「いいね」をクリックすると、  
それが移民局に知れてグリーンカー  
ド(労働許可証)がもらえなくなる  
かも。それを懸念しているのだ。  
心配しすぎという気もするが、そ

うなつても不思議ではないと思わせ  
るところがトランプのトランプたる  
ゆえんなのだろう。

記者会見におけるパイサー報道  
官のしゃべりではなく、それを聞い  
ている記者たちの表情という映像も  
面白かった。バカバカしい、聞くに  
堪えない、あきれた、嘘つけ……。  
そう言わんばかりの顔また顔。余談  
だが、大統領同行の際によくしゃべ  
ったエープリル・ライアン記者の姿  
も出てきて、懐かしかった。

米国では低所得層が新聞をやめ、  
ケーブルテレビをやめ、無料のネッ  
トニュースしか読まなくなり、経済  
格差が知識格差を生み、それがトラ  
ンプ勝利につながったという。SN  
Sの発達に伴う影響力低下と業績不  
振。米メディアの苦境は日本メデイ  
アにとつても他人事ではない。

英紙ガーディアンが導入した寄付  
制度(サポーター)は年49ポンド、パ  
トナーは同149ポンド、パトロン  
は同599ポンド)が紹介されたが、  
エリートと大衆の階層がある国だけ  
ら成り立つ感がなくもない。日本の  
オールドメディアを支える団塊の世  
代は遠からずいなくなる。それまで  
に日本も手を打たなくては……。

日本経済新聞社編集委員兼論説委員

大石 格

## 前川 喜平

前文部科学事務次官

### 文科省は へビに睨まれたカエル?

加計学園事件とは何か。疑惑の深  
い闇が、最も高い証言能力を持つ人  
物によって、1枚ずつベールが剥が  
されていくような会見だった。

第1のベールは、いかに行政がゆ  
がめられたか。国家戦略特区という  
特定主体が恩  
恵を受ける一  
種の利権行政  
が、十分な透  
明性、公平性  
なく進められ  
た。最初に加  
計ありき。そ  
こへもつてい  
くために「獣  
医学部が広域的に存在しない」20  
18年4月開学」との新条件が付加  
され、ライバルの京都産業大が排除  
された。



同特区条件の「国際競争力の強  
化」「国際経済拠点形成」という観点  
からの検証も、閣議決定済みであつ  
た獣医師の需給関係からのチェック  
も不十分。従つて①第三者機関を設  
置しての調査②安倍晋三首相を先頭

にした説明責任の履行③特区諮問会  
議での再検証が必要だと強調した。

第2のベールは、安倍首相周辺で  
誰がそのゆがみを主導したか。前川  
氏によると、キーパーソンは一貫し  
て和泉洋人首相補佐官だという。萩  
生田光一官房副長官は、むしろ文教  
族議員として文科省寄りの調整を期  
待された人物だったが、その後立場  
を変えた。結局、文科省はへビ(官  
邸)に睨まれたカエルだった、とい  
う比喩が、その力学構造を物語る。

第3のベールは、権力とメディア  
という問題だ。5月22日付読売新聞  
の「出会い系バー通い」報道を取り  
上げ、その前日に官邸から接触があ  
ったことを明らかにし「官邸の関  
与」に言及、その因果関係をメデイ  
アがきちんと検証すべきだ、とした。  
恒例の揮ごうは「個人の尊厳 国  
民主権」いわく。国家公務員もまた、  
個人、主権者である。滅私奉公する  
だけでなく、一人間として思想、良  
心を持ち、国民としておかしなこと  
は、何らかの形で伝えるべきだ。粘  
り強く、しなやか、そして強靱にと。

後輩たちへの言葉だった。

この説明のうまさど静かな気迫。  
むしろへビが追い詰められている。

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

倉重 篤郎



## 塩崎 恭久

厚生労働相

### 超高齢社会どう乗り切る

日本の抱える「2025年問題」は、社会保障に携わる人以外にも広く知られるようになってきた。団塊の世代すべてが75歳以上となり、全人口の5人に1人を占める。65歳以上まで含めると3人に1人に近づ



く。人類がかつて経験したことのない「超々高齢社会」が到来する。塩崎恭久厚生労働相は海外で会議に出席するたびに、高齢化をテーマにした講演を求められるとい

う。「日本がこの高齢社会をどう乗り切るかに、世界は注目している。今の仕組みのままではうまくいかない。新しい成功モデルを示したい」と意気込む。

そのための処方箋を、塩崎氏は会見で医療・介護の分野を中心に示した。自治体や医薬品の開発現場で医師免許を持った人材が不足しているとして「医師をもっと増やすべき

だ」と訴えた。医療・介護分野の計画を取りまとめる都道府県には、地元医師会などと協議する専門職が必要だと指摘。製薬会社でも海外と比べて医師が少ないことに言及し「行政、国際機関、研究開発など必要としている分野はいっぱいある。医師養成はもっとやれと言っている」と理由を説明した。

一方、大学医学部の定員は増員が続き、将来的には医師数が過剰になるとの推計もある。これに関し塩崎氏は「臨床医がそんなに必要かどうかは別（の問題）だ」とやや歯切れが悪かった。介護分野では5月に成立した改正介護保険関連法などを踏まえ「自立と重度化防止をどうするか」が大事」と強調した。

現状の不備をなんとか解消しようとする意欲は伝わってきた。ただ政治家に求められるのは、より大きな制度設計だろう。社会保障財源をどう裏付けるかの考えをもっと聞きたかった。安倍政権は消費税率10%への引き上げを2度にわたって先送りしている。痛みを伴う施策であっても国民に理解を求めて実行に移す決意なしに、世界に手本を示すのは難しい。

共同通信社生活報道部長 須佐美文孝

## 権丈 善一

慶応大学教授

### ラ・ラ・ランドに医師は、配置されるか？

「国民会議の時はみんな明るかった。新たな財源で社会保障のアレをよくしよう、コレをよくしようというアイデアを出し合っていた。しかし今や、ラ・ラ・ランド状態だ」。権丈氏の言う洋画「ラ・ラ・ランド」は、



今や別々の道を歩む2人が、偶然再会し、あり得たはずの2人の幸せな生活と現実とが、想い出の曲と共に出の曲と交錯するとい

う、切ないラストを迎える。消費増税の2度の先送りで、将来の財源のメドが立たない一体改革を振り返るのも、苦しいのは同じということだろう。

団塊の世代が全員、後期高齢者入りをする2025年、どうすれば医療・介護を維持できるのか？ その青写真を描いたのが13年の社会保障制度改革国民会議の報告書であり、その医療・介護編の起草委員が権丈

氏。慢性病が増える超高齢社会で、医療の目的をQOL＝生活の質の向上とするのなら、医療と介護の違いはなくなる。両方を一体として切れ目なく提供しようという地域包括ケアは、この考えに基づく。

しかし、ここで懸念されるのが、いわゆる医師の偏在問題。医療や介護をどう提供するか決めても、そこに医師が存在しなければ、絵に描いた餅。医師が都市部に集中して、地方の医師不足が深刻化したり、一部の診療科に偏っている現状を是正する必要がある。

厚生労働省の専門部会は昨年、医師の開業には僻地での勤務を条件とするなど、一定の規制の検討が必要とする中間取りまとめを行った。ところが、大臣の肝いりでその後でできた別の検討会は、規制に否定的な報告書をまとめた。さらに権丈氏によると、もともとの専門部会の委員は、後からできた検討会について正しい説明を受けておらず、手続的に疑義があることも、会見で資料を提示しながら説明した。

内容が異なる2つの報告書をどうまとめるのか？ 2025年、ラ・ラ・ランドに医師はちゃんと配置されているだろうか？

企画委員 NHK解説委員 竹田 忠

試写会「セールスマン」

&主演女優記者会見

アカデミー賞授賞式を  
ボイコット

「多くの映画人が抗議の声を  
上げ、うれしかった」

イラン映画の国際的評価が高まる中で、米アカデミー賞で外国語映画賞、昨年のカンヌ国際映画祭男優賞



と脚本賞を、それぞれ受賞した。だが主演女優タラネ・アリドウスティさんは、アカデミー賞受賞が2度目のアスガ1・ファルハデイ監督と共に、今年の米アカデミー賞授賞式をボイコットした。ランプ米大統領によるイスラム圏からの入国規制に抗議するためだ。日本記者クラブで主演女優が試写会後に会見するのは初めて。アリドウスティさんは、2002年、ロカルノ国際映画祭で女優賞を受賞。名匠ファルハデイ監督の作品出演は今回が4回目で、国民的な女優だ。

会見に現れたアリドウスティさんの服装は、ヘジヤブをかぶり、薄い服の下にはジーンズが透けて見えた。欧米とイスラムの文化が融合したようなファッションだ。

アカデミー賞授賞式へのボイコットについては「授賞式に参加したい気持ちはあったが、抗議のため出席を拒否した。会場で多くの国の映画人が抗議の声を上げてくれた。受賞よりもうれしかった」と話した。

映画は、近代化するイランで性暴力を受けながらも被害届を拒む妻と独自に犯人を捜す夫との葛藤をサスペンスタッチで描いている。アーサー・ミラーの戯曲「セールスマンの死」が劇中劇で織り込まれ、映画に深みを持たせている。

イラン映画の検閲については「検閲は1作品で2回あるが、この映画は検閲による修正はなかった」と語った。また「どうすれば検閲に引っかけられるか分かってるので、検閲官と話し合い、納得するか、納得させられないこととなる。最近検閲で不許可となることはあまりない。政治側と芸術家側が、共にもつと近づいて1つになることを希望している」と述べた。

共同通信社客員論説委員

安尾 芳典

会見余話

● 6・23 都議選、海老蔵、前川会見と重なる

大きな注目を集めた前川喜平・前文科事務次官の会見は、2つの大きなニュースと重なった。

1つは都議選の告示。前川問題は政治的影響力があるので、「会見をわざと告示日にぶつけたのでは」との憶測が起きないように、司会の倉重企画委員は冒頭に「(会見日時は)前川さんと当クラブとの物理的制約で決まったもので、特段の

意図はない」と説明した。

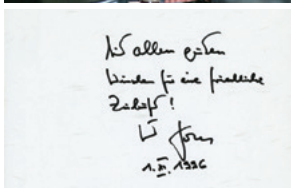
もう1つは、前日、妻の小林麻央さんを亡くした市川海老蔵さんの記者会見。テレビカメラがズバリ並んだ前川会見では、いつもなら先を争うように手を挙げた民放情報番組のキャスターたちの姿がみえない。海老蔵会見の影響だ。

前川会見も民放で生中継が流れたが、途中で海老蔵関連のニュースに戻ると、当クラブの受付には「なぜ前川会見の中継をやめたんだ」と「筋違い」の抗議電話もかかってきた。

● 3-3 対 2-0

一見野球のスコアのようなのだが、この意味するところは？ 前段は6月16日に死去したコール独首相、後段はメルケル現独首相に関する。

3と2はそれぞれの来日回数(サミットを除く)。3と0はクラブでの会見数。



当クラブで3度目の会見をするコール独首相。揮ごうには「平和な未来を祈願して」と(1996年11月1日)

コールさんの会見率は何と10割。初回は、就任1年後の83年11月、2回目は東西統一後2年余の93年2月、3回目はユーロ導入2年前の96年11月。193センチで120キロを超すといわれた体を思い出す。かたやメルケル首相は、2007年と2015年来日したが、いずれも会見は実現していない。

今年9月の下院選挙で勝てば、コールさんと同じ4期16年の首相在任となる。今のところ、その可能性は高そうだが、「官僚機構の前例踏襲は世界共通」と信じ、0が1になるように働きかけたい。



■誰でも調査報道

第3回・ハウツー基礎講座②

(取材編)

6・8(木)講師・奥山俊宏・朝日新聞社編集委員 / 出席:49人

◎追体験 調査報道の舞台裏

「誰でも調査報道」というタイトルが気になって参加した今回の記者ゼミ。これまで調査報道は遊軍の先輩記者がやるものであって、日々当局を取材していて、ましてや記者生活4年目の自分にとっては、無縁のものと考えていた。

しかし、今回の講座はその考え方を大きく変えるものであった。3回目の講座では、リサーチで集めた情報をもとに、いかに対象者を取材していくのか、どのようにして裏取りをしていくのか、朝日新聞の奥山さんが執筆した実際の記事などを使って解説した。

紹介された事例は政治家が絡むものから民間企業を波及したものなど多岐にわたっていて、自分がいま置かれている立場で調査報道をするとしたらどうすればいいのかということを考えておきたい。同時に、どんな立場にあっても調査報道に取り組んでみようという意識が必要だと強く感じた。

TBSテレビ報道局社会部

松尾 一志

第4回・情報公開と公開情報①

6・22(木)講師・三木由希子・情報公開クリアリングハウス理事長 / 布施祐仁・フリージャーナリスト / 出席:35人

◎真実導き出すノウハウ

隠されている事象や隠されている真実を導き出すことが記者の仕事のエッセンスであることを再確認する機会となった。

正直に言えば、日本の新聞社の記者と違って、警察が扱う事件や事故を取材する経験もなく、調査報道を専門に担当したこともない。

だが、社会問題などを幅広くカバーし、速報性が求められる業務において、どのような情報にアクセスできるか、どのようにその情報を入力するかが日々の課題である。そこで、調査報道のプロセスを使って取材することで可能性が高まると思い、ゼミへ参加することにした。

ゼミで紹介された公文書の正式な入手法は、タレコミをはじめ、繊細な情報を記事化するための裏取りに欠かせないノウハウなのでは、と改めて思った。

それは、行政機関がどのように動くかを知るヒントにもなったともいえる。

ジャパンタイムズ報道部

大住 マグダレナ

■IT講座2017

第2回・表計算中級

6・1(木)講師・松波功・中日新聞社電子編集部 / 出席:38人

◎胸に響いた「独自の視点」

表計算ソフトは少し触れる程度の身としては不安ばかり。思い切って参加したのは、自社サイトに役立つヒントをつかむためだ。QGIS(地理情報システムソフト)に必要なデータをソフトで抽出、加工する方法を学んだ。表計算ソフトについては、付け焼き刃を改めて痛感。講師のパソコン画面と自分の画面が異なる場面では操作に戸惑ったが、周囲の参加者の助言に支えられて、第2回を終えることができた。

データ分析のスキルを磨くのがこの講座の主眼ではない。求められるのは自らの視点を持つことだという。「完全ではない発表資料から知りたいデータを探し出し、独自の視点を持ち取材することが大切」との講師の言葉を胸に刻み、次回以降に臨みたい。前途多難であることに変わりはないのだが……。

神戸新聞社編集局ネクスト編集部

落合 直志

第3回・QGIS入門

6・15(木)講師・山本智・NHK報道局ネット報道部チーフ・プロデューサー / 出席:31人

◎表現、さらには調査のツールに

パソコンのキーボードは人差し指と親指だけで打ち(ただしブラインドタッチなので、気持ち悪がられる)、ショートカットキーの存在もこの講座で知った私が今回学んだのは、地理情報システムソフト「QGIS」の操作方法だった。

不安だったが、目の前で操作の根本を見せてもらいながらだと、割にあっさりと都内23区の住宅の地価上昇率を色の濃淡で示すことができた。できた地図を見れば、近年よく指摘されている住宅の「都心回帰」傾向は一目瞭然だ。

ただ、今回使ったデータは講座用に用意されていたものだ。自らアイデアを出し、ふさわしいデータを見つけ、形を整えて分析、結論を導き出す。こうやって考えれば、道はやっぱり険しいが、まずは「表現」、さらには「調査報道」のツールとして使えるようになってほしいと思う。

毎日新聞社経済部 岡 大介

【事務局から】開講時間を夜に変更したことが幸い(?)したのか、両講座とも皆勤受講生を中心に毎回30人を超える盛況となっています。7月は「誰でも調査報道」が20日、「IT講座」が13、27日で、いずれも木曜午後6時からです。この後、夏休みとなり、再開は9月中旬です。次号で日程をお知らせします。途中からの登録もできますので、希望者は事務局(semantic@njpc.or.jp)へ。

欧州取材この1年

石合 力(朝日新聞社ヨーロッパ総局長)

## 予測不能な世界で 変革の潮流を探る

「過去1年、私が予想したことはことごとく間違っていた」

元駐日大使で英ジャパンソサエティ(日本協会)会長を務めるデイビッド・ウォレンさんと先日、食事を一緒にした際、ウォレンさんが自嘲気味に語った言葉だ。もちろん英国紳士ならではの謙遜なのだが、外交・国際問題を熟知する専門家でも、いや、むしろ専門家であるが故に予測できない事態が相次ぐ。

われわれメディアも例外ではない。そんな激動期の欧州をどう報じるか。着任して1年の自問自答をお伝えしたい。

### 取材は「裁判の予定稿」?

大方の「残留」予想が外れた英国の欧州連合(EU)離脱(ブレグジット)をめぐる国民投票から約1年。今年6月の英総選挙も当日まで「予測不能」だった。下院の解散直後、保守党、労働党の支持率の差は20ポイント

超。ところが選挙戦終盤に、ある調査会社の数字ではその差が3ポイントに迫るなか、「ブレグジットの悪夢」が再び現実味を帯びてきた。

データ上の変化をどう裏付けるか。やはり現場を歩くしかない。特派員で手分けして労働党が支持を伸ばしている地域に入った。ウェールズで私が取材したある候補の陣営責任者は20代の失業者だった。保守党政権下の緊縮財政政策に対する不満には実感がこもっていた。

一方で、足では稼げないネット空間も現場の1つ。投票日直前のコラムではメイ氏を揶揄するポップスの曲がチャート首位になったことを通じて、「メイ離れ」の空気も伝えた。

ただ、冷静に結果をみれば、保守党は第一党で政権交代は起きていないとも言える。さまざま結果を想定して勝訴、敗訴の予定稿を用意する裁判原稿のような取材が続く。

### 仏大統領選とパラダイムシフト

6月末にロンドンで講演したキッシンジャー元米元国務長官(94)は、1648年のウェストファリア条約以来の主権国家、力の均衡に基づく世界秩序が今、歴史や文化の異なる別の秩序と対峙している、と語った。超国家組織の代表、欧州連合(EU)も英国の離脱や域内の経済危機で足元が揺らぐ。世界、そして欧州が400年来の変革期にあるとすれば、予測しにくいのも当然だろう。そこで起きている価値観の劇的な変化とは何か。5月の仏大統領選は、それを探る機会でもあった。

チーム取材をしながら意識したのは、伝統的な左翼、右翼、中道という視点に代わって、「グローバル化への対応(自由競争か保護主義か)」「(移民などに)社会を開くのか、閉じるのか」という新たな対立軸だ。右翼ルペン氏と左翼メラニョン氏は、イデオロギーでは両極だが、ともに保護主義的な路線を取る。

二大政党制に回帰した英国とマクロン新党が圧勝したフランスだが、グローバル化に対応できる高等教育を受けた「どこでも派(Anywhere)と、国や地域への帰属意識が高い「どこか派(Somewhere)



社会派映画監督ケン・ローチ氏にインタビュー。最新作「わたしは、ダニエル・ブレイク」では、保守党政権下の緊縮政策下で苦しむ最貧困層の実相を描いた。「映画や音楽、建築などの取材を通じて、芸術と政治、社会が交錯する欧州の空気も伝えたい」と石合氏(2017年1月/末盛亮氏撮影)

ere)の深刻な分断(英シンクタンクのグッドハート研究部長)と読み解けば共通点も見えてくる。虫の目で現場を歩きながら、鳥の目でパラダイムシフトも探りたい。

じっくり腰を据えて取材したいと結びたいところだが、英国を含め、欧州各地で「イスラム国(ISIS)への共鳴をうたう無差別テロが相次ぐ。中東取材や東京本社での在勤中に留意してきた同僚や帯同の家族、現地スタッフの安全確保への対応は、いまや欧州でも欠かせない。

いしあい・つとむ▼1988年入社  
シントン支局 中東アフリカ総局長  
国際報道部長など 昨年7月から現職



## 獣医師偏在

村永 哲哉(宮崎日日新聞社報道部)

「加計学園問題」に思う  
地方の現状に目を向けて

約110万頭の牛と豚、約3300万羽の鶏を飼う国内有数の畜産県・宮崎。先日、県内の家畜保健衛生所(家保)で活躍する2人の若手獣医師に話を聞いた。農業に縁もゆかりもなかったという2人に、公務員獣医師の職に就いた理由を尋ねると、「大学時代の実習で牛や豚と触れ合い、産業動物に関わりたかった」と説明。獣医学系大学の存在意義を改めて感じた。

2010年4月20日、宮崎県で29万7808頭の家畜の命が犠牲となった家畜伝染病「口蹄疫」が発生した。被害が拡大した主な背景には、殺処分などの防疫措置がスムーズに進まなかったことが挙げられる。その要因の1つとして、農水省の口蹄疫対策委員会の報告書は家保に勤務する公務員獣医師の不足を指摘した。

口蹄疫発生前の09年、宮崎県内の家保に勤務する獣医師は47人。1人当たりが管理する農家の戸数は全国最多の246戸で、全国平均(52戸)を大きく上回っていた。1人当たり

の家畜の管理頭数も、全国最多の1万5342頭(同4244頭)だった。

宮崎県は口蹄疫以降、あの手この手で獣医師確保に取り組んでいる。しかし、全国で毎年10000人ほどの新規資格取得者のうち、公務員を希望する1〜2割の人数を、国や都道府県、市町村が奪い合う構図が長年続いており、対策は一朝一夕にはいかないのが実情だ。

## 「獣医師足りている」に疑問

学校法人加計学園の獣医学部新設に関する、いわゆる「加計学園問題」をめぐる、与野党のやりとりや一部報道の中で、日本獣医師会の「獣医師は足りている」との言葉が独り歩きしているように感じる。

都市部で、それも犬や猫といったペット中心の小動物を扱う分野で、獣医師の数が足りていることは理解できる。一方、牛や豚など大型の産業動物を扱う獣医師や、家畜の疾病予防や食肉の衛生検査など、私た

ちの暮らしに欠かせない業務を担う公務員獣医師の数が十分だとは思えない。特に地方は獣医師不足で、人材確保に苦しんでいるのが現状だ。

宮崎県内の農業共済組合(NOSA I)など、民間団体からも「産業動物を扱う獣医師は、採用予定者数を確保できない状況が続いている」との声を聞く。

口蹄疫の際は、県内の獣医師だけでは殺処分が追い付かず、多い日は1日200人以上もの県外獣医師に応援を求める日々が、3カ月近く続いた。農家やその家族らも応援に入ったが、慣れない作業のため、牛に突き飛ばされるなどして、骨折や内臓破裂といったけがを負う事例もあった。公務員獣医師に加え、牛や豚を扱うプロフェッショナルを1人でも多く確保することも、畜産業が盛んな地方に共通する課題だ。

だからといって、獣医学部をどんどん増やせばいいという単純な話ではない。卒業生が地方で産業動物や公務員の道を選ぶ保証はなく、獣医師が増えることにより、質の低下につながるなどの懸念があるからだ。ペット市場の頭打ちに伴い、小動物に携わる獣医師へのアプローチや公務員獣医師の待遇改善など、対策は他にも考えられる。

## 今こそ本質を議論してほしい

「総理のご意向」と書かれた文書の存在は「特区選定に政府が圧力をかけたのか」。加計学園問題では獣医師をめぐる本質の課題よりも、安倍首相ら政府の疑惑を追及する与野党の議論だけが目立っている。

自身も公務員獣医師として勤務した経験を持ち、宮崎県獣医師会会長を6年間務めた足利忠敬氏は「都市部の生活に直結する問題であれば、もっと身のある議論になったのでは」と語った。これまでも、地方の課題をテーマに、各政党が足を引っ張り合うだけの議論を目にしてきた。地方の思いが都市部まで届かないもどかしさを感じる問題でもある。

地域や分野ごとに獣医師が偏在していることが、地方が獣医師不足に苦しむ理由だ。今回の騒動がこの問題を国全体で、本気で考えるきっかけになればと願っている。牛や豚、鶏の鳴き声が響くのどかな風景と、安心・安全でおいしいお肉が食卓やスーパーに並ぶ日常が、いつまでも続いていくためにも。

むらなが・つや▼2011年入社  
報道部で警察 社会班などを担当 16年  
からは農政担当

新・列島報告① 別府

## 前代未聞の自治体プロモーション 「湯〜園地」計画は地方の希望となるか

田尻 雅彦  
(大分合同新聞社)



「市長の大風呂敷だろう」と半信半疑で受け止めていたが、わずか3日間で目標に到達した。

大分合同新聞の扱いは、動画公開時が社会面の20数行のコラム記事、100万回達成の時点では1面に「出世」した。ネットの情報拡散力を測りかねて、取材現場としても価値判断に迷ったというのが正直なところだ。全国放送のテレビ番組で取り上げられたという追い風があったにせよ、再生数の勢いには目を見張るものがあった。

### ■驚異的なネットの拡散力 記者も小まめにスマホチェック

湯〜園地の実現に向けて、次の課題となったのが資金の調達。財政に余力のない別府市は、ネット上で不特定多数の人から資金を募る「クラウドファンディング」に活路を求めた。出資者には入園券などの「返礼」を贈るというシステムだ。

さて、一体どれほどの資金が集まるのか。これも想像がつかない。動画の急展開を教訓に、小まめにスマートフォンをチェックする日々が続いた。クラウドファンディングは手続きが煩雑なこともあり、並行して市役所で現金の寄付も受け付けた。最低ラインに設定した1千万円は

早々にクリア。この原稿を書いている6月中旬の時点で6千万円超と、かなりの額に膨らんでいる。

昨年4月の熊本地震では大分県も大きく揺れ、別府市では県内の観測史上最大となる震度6弱を記録した。幸い、大きな被害はなかったものの、基幹産業である観光は客足が遠のき、大打撃を受けた。

全国ニュースになった湯〜園地は明るい話題をもたらし、復興を目指す市民を元気づけたことは間違いない。もちろん、慎重な意見もある。観光関係者からは「期待感が大きいだけに、動画の内容が十分に再現できなかったら反動でイメージダウンになるのでは」と心配する声も聞こえる。

湯〜園地は7月29日から31日まで、動画の舞台となった老舗遊園地「別府ラクテンチ」にその姿を現す。



別府市作成のPR動画から

大分合同新聞はウェブサイトで動画配信班を含め、複数の記者を投入する取材計画を立てている。期待に沿うのか、不安が的中するのか。前代未聞の試みの行方を、しっかりと見届けたい。

### ■「成功例」目の当たりに 他団体も続々挑戦

3日間のイベントの成否とともに、クラウドファンディングの広がりにも目を向けた。湯〜園地の資金調達が一定の成果を上げたのを見て、別府市内の民間団体は次々とクラウドファンディングに挑戦し始めた。地震で解体を余儀なくされた小規模な温泉施設に、火事で焼けてしまった人気のライブハウス。これらの復活を目指し、賛同者を募っている。

「地方自治体にとっても、湯〜園地の手法はモデルになるはず」と長野市長は自負する。ふるさと納税とも通じる「寄付」と「返礼」の仕組みは、官民間わず財源確保に苦心する地方に新たな道を開くのだろうか。湯〜園地という夢の背後にある、地方の現実が気にかかる。

たじり・まさひこ▼1998年入社  
社会部警察担当 大分臨海 日出(ひじ)の両支局長を経て 2012年から  
2度目の別府支社編集部





被災地通信⑤ 岩手県気仙地方

## 待望の中心商業施設開業 紙面展開もエールを込めて

長内 亮介 (岩手日報社)

東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県沿岸南部の大船渡市と陸前高田市の中心市街地に4月、大型商業施設が相次いでオープンした。隣接する内陸部の住田町を含めた、2市1町で構成する気仙地方において「まちの顔」とも言える施設の完成は、復興の進展を実感できる大きな節目となった。

大船渡市のJRR大船渡駅周辺にオープンしたのは「キャッセン大船渡」と「おおふなと夢商店街協同組合」が整備した計3施設。仮設店舗

で奮闘してきた事業者らが、真新しい本設の店舗で営業する。

キャッセンの2施設は4月29日のオープンから5月7日までの大型連休期間中、約4万4千人が来場し、当初計画を上回る好調な出足。ともに見学機能を有する、菓子店の「フアクトリーショップ」やワイナリーなども順次完成予定で、商業と観光の一大集積地になりそうだ。

大船渡市に隣接する陸前高田市でも4月27日に大型商業施設「アバッセたかた」が開業した。かさ上げし、造成した中心市街地に誕生した初めての建物で、こちらも来場客数は好調。遊具が置かれた広場は家族連れ向けの場だ。

### ■終息と途上の復興

しかし、震災後に大船渡市内の経



4月30日付紙面に掲載した大船渡市の中心商業施設の特集(筆者提供)

済を支えた復興需要は既にピークを越えている。3800億円を超えるが見込まれる復興事業は、事業費ベースで見ると、2016年度末までに8割以上が完了か着手済みとなっている。

一方、陸前高田市はアバッセ周辺の宅地整備と、その後の住宅整備完了にはまだ数年を要する。被災した市役所庁舎の建設場所が決定したのは今年6月で、震災から6年以上を経ても「まちの完成図」を具体的にイメージしづらい状況だ。

人々がどう暮らし、どう動くのか。オープン効果が一段落した今後が、新たに誕生した施設にとって正念場とも言える。

### ■「伴走型」の姿勢で

そんな中、岩手日報は両市の施設オープンに合わせて、それぞれ見開き2ページの特集を掲載した。

陸前高田支局が担当したアバッセの特集は、従業員の写真付きでテナントを紹介したほか、出店業者のインタビュー、来場者のコメントなど多角的な報道を展開した。震災前後の市街地を写した写真と、開業当日の「よんぞこ(こまで)」と意を強くする。

筆者が所属する大船渡支局が担当したキャッセンと夢商店街の特集で力を入れたのは、店舗紹介を兼ねたマップづくりだ。

各店の名物や店主の意気込みを写真と共にグラフィックに落とし込んで紹介しようと計画したが、これが大いに難航。開業間近で大忙しの店主に「申し訳ない」とわびながらの事前取材、一部店舗はオープン当日の取材となり、同僚記者と「間に合うだろうか」と肝を冷やした。

今回の特集は、ともすれば施設自体が行うべき「広告・広報」の領域かもしれない。ただ、両特集ともにスタート地点は「震災風化」が叫ばれる中で、この施設、ひいては震災で傷ついたこの地域に多くの人が来てくれるにはどうすればいいだろうか」という記者として、地元に住む者としての思いだ。

まちづくりの成否や人口減少との闘いなど今後、施設が直面する課題も多いだろう。それは、一朝一夕では解決できない地域が抱える悩みに通じる。その課題を丁寧に取り上げ、時にエールを送りながら、息の長い「伴走型」の報道を心掛けたい。

おさない・りょうすけ▼2004年入社  
宮古支局 整理部を経て 17年4月から大船渡支局長

# マクロン登場に思う

## ジスカールデスタンとの比較、ドローールとの類似

伴野 文夫



ばんの・ふみお  
1933年生まれ 59年NHK入局  
ブリュッセル パリ ボン(西ド  
イツ)の各特派員 解説委員 退  
職後 杏林大学教授 著書『ユ  
ーロは絶対に崩壊しない』(幻冬舎  
16年9月)ほか

これは特ダネ話ではありません。大陸ヨーロッパを取材して50年の後期高齢記者の物語です。私は今年7回目の酉年を過ごしていて、生前ご退位の高貴な方と全くの同い年、そろそろ引退の年頃です。

### ◆ドゴール将軍はまだ現役だった

私が初めてヨーロッパの土を踏んだのは、1968年。あの5月危機のパリの騒乱の直後でした。フランスではドゴールがまだ大統領で、毎年2回行われる恒例の記者会見の生中継をブリュッセルで見ることができました。当時78歳だったドゴールは5月危機で若者の反乱にもみくちゃにされ疲れ果てていたのでしょうか、中継される会見の最中に、しばしば咳き込む場面がありました。ドゴールは自らの高齢と時代の変

化を察知したのでしようか、翌69年、負けると分かっている国民投票を仕掛けて否決されると、さっさと辞任して田舎の自宅に閉じこもってしまいました。

戦後のドゴールは米ソ2大国の世界支配に反発し、米英アングロサクソンの支配に徹底的に抵抗しました。中国共産党政権の承認、NATOの軍事機構からの脱退、イギリスのEC(欧州共同体)への加盟拒否、等々です。

しかしドゴールが引退するとその弟子たちは、直ちに師がかたくなに閉ざしていた扉を押し開いて、フランスの近代化に取り組みました。イギリスのEC加盟も承認されました。ドゴールは、イギリス加盟の日を待つことなく70年11月、この世を去りました。

### ◆ジスカールデスタンの演説を入手

ドゴールの弟子でありながら近代化の先頭に立った1人が、若きヴァレリ・ジスカールデスタン蔵相でした。

ジスカールデスタンが初めて身近に現れたのは、1964年の東京オリンピックの直前、同年9月にホテル・オークラで開かれたIMF総会でした。当時38歳、エリート・コースを歩む長身のハンサムで、絵に描いたような貴公子ぶりでした。それでも大統領に当選したのは10年後の48歳ですから、今度大統領の座に一気に駆け上った39歳のマクロンは信じられない記録男です。

当時ドゴール大統領はアメリカのドル支配に対抗して金本位制の復活を時に口にしていたので、ジスカール

デスタン蔵相の演説には大きな注目が集まっていました。地方局から東京に上がってきたばかりの私は、難しい演説になりそうなのでテキストをもらっておいの方がいいと考え、ホテルの奥まった所にあるフランス代表団の部屋に出かけました。タイプを打っていた中年の女性に、大臣の演説のテキストが欲しいんだけどと言うと、今私が打っているのがその演説よ。待つてなさい、すぐあげると言います。5分後にはテキストを手に入れて持ち帰りました。当時は今のようないやらしいセキュリティーは全くありませんでした。これが大変なことになります。ジスカールデスタンの演説は予想どおり、金を中心に各国通貨を同心円の形に配置するという複雑な話でした。ところが仏代表団は、この提案



は完全に固まったものではないという理由で、テキストの配布はしないと通告してきたのです。そこで全ての国際記者団でテキストを持っていくのは私一人という事態になったのです。先輩記者から大いに感謝され、噂を聞いた大蔵省の担当官もコピーを取らせてくれと言っていました。が、代表団へ行く廊下は翌日からびしゃりと閉ざされてしまいました。その後フランスは、この提案を二度と口にしませんでした。実現不可能と知りながら世界をちよつと揺さぶってやるうという、ドゴール一流の仕掛けだったのでしょうか。

#### ◆ドローール委員長のEU革命

ジスカールデスタンの次に記憶に残るのは、1985年から例外的に長い10年間、EC委員長を務めたジャック・ドローールです。私は89年にNHKを卒業しており、ドローールを直接取材したことはありませんが、ECからEUへの飛躍的な発展を実現した彼の業績には、大いに注目していました。95年に任期を終えるドローールは、翌年春のフランス大統領選挙の最有力候補になっていて、世論調査ではダントツの1位でした。この頃ドローールについて書かれたものを探していた私は、1冊の本を

見つけました。The Economistのブリュッセル特派員、チャールズ・グランツが書いたドローールの評伝です。翌年春のフランス大統領選を指して翻訳出版しようと考えたのですが、肝心のドローールが高齢を理由に出馬に応じません。当時ちょうど70歳、やや年を取っていたのですが、やってやれないほどではありません。しかし間もなく最終的に立候補しないと宣言してしまいました。

やりかけの翻訳は完全に宙に浮いてしまいました。しかし、この本には他では聞けない貴重な記録がたくさん盛り込まれています。なにしろグランツはイギリス人でありながら、このフランス人委員長にぞっこん惚れこんで密着取材し、後にフランス社会党に入党してしまうほどだったのです。

もうドローールを売り物にしても出版社の関心を引くことはできません。そこでドローール人物伝の部分を抜いて、EC改革の秘録だけに絞れば、出版にこぎ着けられるのではなにかと考えグランツ氏に直接交渉したところ、すぐにOKをくれました。この本は95年、『EUを創った男——ドローール時代十年の秘録』というタイトルで、NHKブックスで出版されました。結構読んでいただいたの

ですが、残念なことに10年ほど前に絶版になってしまいました。

#### ◆イデオロギー政党の時代は終わった

ジスカールデスタンとドローールの2人は、マクロン大統領の登場を機会に、クローズアップされています。マクロンはジスカールデスタンの再来かとフランスの週刊誌が書きました。若き俊英の登場というところは共通するのですが、ジスカールデスタンの中道と、マクロンの「右でも左でもない」は大分違います。ジスカールデスタンは70年代のフランス社会に定着した中間層を代表する中道穏健派ですが、マクロンは左右に分裂するイデオロギー政党の時代は終わったとして、国民的な再結集を呼びかける革命的な発想です。

私はマクロンを見てみるとジスカールデスタンよりドローールを思い出します。ドローールは停滞を続けるECに乗り込み、マーストリヒト条約を仕上げてEU国家連合をつくり、単一通貨導入を整えるところまでやり遂げました。ヨーロッパにとって、これはまさに革命です。マクロンも、その著書『革命』でドローールに対する敬意を表明しています。

マクロンのドイツに対する考え方もドローールに共通するものがありま

す。強いドイツに対する今のフランスの対応には、負け犬意識と反発が入り混じっています。マクロンは違います。フランスはドイツに負けない経済を立て直す、そしてドイツと肩を組んでEUの遅れた地域に対する投資に取り組むというのです。マクロンが吹く起床ラップが鳴り渡りました。これから5年間、フランス国民がこの呼びかけにどのよう

に応えるかが見どころになります。それにしても日本のメディアはなぜマリーヌ・ルペンばかり騒ぎ立てて、マクロンについて書かないのでしょうか？ おそらくロンドンの論調に引きずられているのではないのでしょうか。元財務官の内海孚氏が5月11日の日経新聞のコラム「私見卓見」に、日本のメディアはアングロサクソン情報の呪縛にとらわれすぎていると、警告の言葉を書きました。

トランプが迷走を続け、メイ政権が離脱交渉で頭がいっぱいという状況をみるにつけても、メルケルとマクロンのヨーロッパは、世界秩序を立て直す最前線に立つことになると思います。それと腕を組む力を持つのは日本です。大陸ヨーロッパを見る複眼的な視点をしっかりと取り戻さなければ、日本は今後の針路を見誤ります。

私<sup>が</sup>会<sup>った</sup>  
あ<sup>の</sup>人

## 企業の私物化を批判

## 異例の大抜擢・山下俊彦さん

伊藤 裕造(朝日新聞出身)

山下俊彦さんを「この人は面白い」と最初に意識したのは経団連会館での記者会見の後だった。ホールで社員とやりとりしているうちに、突然階段を駆け下り始めた。エレベーターが来るのを待っていないで、階段10階分を一気に走り下りなければならなくなつた松下電器の方は大変だつたろうが、「山下跳び」と言われ、松下幸之助さんから大抜擢されたのを、妙に納得したような気になつた。今思えば、決断が速く、即実行される一面がうかがえ、いたく感心したので。

支局から経済部に移り、2年目、経団連の機械クラブで電機担当になつた頃の話だ。朝日新聞では当時、松下は大阪経済部が担当し、東京は日立、東芝、三菱電機などの重電系をカバーしていたので、多少気楽だつたこともあり、会える算段はした。大阪に戻られない

時、高輪プリンスホテルの1006号室のドアをノックする。タイムイングが良ければ部屋に入れる。山下さんはアルコールに滅茶苦茶強く、必ず洋酒の用意がしてあるので、うまくいけばお付き合いできた。

状況が変わつたのが幸之助さんが1979年6月25日に訪中し、鄧小平に会談してからだった。中国の電子産業の育成に日本の電子産業全体で面倒をみる約束をしたのだ。当時、幸之助さんは84歳。帰国後、真夏の暑い中、電子産業のトップに順次面会し、協力を求める。それぞれ表面的にはそれなりの回答はするが、既に中国の現地生産で苦勞しているので、「とても乗れる話ではない。松下さんお一人で」というのが本音。山下さんもそこはわかつてい

夏も終わり、秋から翌年にかけて華国鋒主席をはじめ中国の要人が来日する。幸之助さんも、東京の雰囲気が多多少少わかつてきたようだが、鄧

小平との約束は守らなければならぬ。共にするのは三洋電機の井植薫さんだけではなかつたらうか。ある晩、「このままでは松下単独でも、となれば、大松下と言えどもつぶれますよ」と山下さんに率直に申しあげた。「わかっている。でも、幸之助さんには、この俺でも言えない」といったようなやりとりが続いた。

一方、日本電子機械工業会で懇談会をつくり、どういう援助が可能か検討しようとか、通産省(現・経済産業省)も介入しようとしているなど、混迷し始めてもいた。また、この頃には幸之助さんがメディアとは全く会わなくなつていった。

構想が打ち出されてから約3カ月、10月の初めに何とか幸之助さんとの単独インタビューができること



松下電器本社を訪れた中国の谷牧副首相(右から2人目)を案内する松下幸之助相談役(右端)と山下俊彦社長(左端)(1979年9月10日/時事通信社提供)

になった。30分という制限付きだったが、東京の状況を説明しても、納得されない。中国の近代化に協力することになぜ、前向きにならないのか、もつともな疑問なのだ。ソニーの盛田昭夫会長の、中国との「合弁自体矛盾がある」との声に代表される状況を1時間半余り説明したところ、やっと「あさまへんかな」とつぶやかれた。「松下構想」を実質的に断念される一言だった。

それから20年近くたった97年、大阪の経済部長だった私は再び、直接、間接に山下さんの話を伺う機会ができた。その1つが幸之助さんの孫、正幸さんの処遇についての発言だった。「副社長になる能力のない人をしてしまった」と社長世襲の動きにくぎを刺したのだ。当時の森下洋一社長が同意の考えを表明して、さつと収まったが、創業者の影響がまだまだ残る企業私物化の日本の風土に、飄々と反対し続けた人だった。

(いとう・ゆうぞう 元朝日新聞経済部長、元東日本放送社長)

次号は八牧浩行さん(時事通信出身)にバトンが渡ります。



# ジャーナリストたちの連帯を デイビッド・ケイ教授の危機意識

音 好宏(上智大学教授)

デイビッド・ケイ教授が強調したのは、ジャーナリズムの独立性と、職場を越えたジャーナリストたちの連帯の重要性だった。

## ジャーナリストの在り方

6月2日、上智大学で、「報道の自由とジャーナリストの保護」というシンポジウムを開催した。そこでキーノートスピーチを担当した一人が、ケイ教授であった。

シンポジウムのことを少し説明しておく、上智大学では、春と秋の年2回、「国連ウィーク」という国連と連携したイベントを集中的に行う期間を設けている。その背景には、国際機関で働くOB、OGや、就職を希望する学生が多いということがあるのだが、その一環として開催されたのがこのシンポジウムである。

担当したのは、上智大学の常設研究組織であるメディア・ジャーナリズム研究所で、国内外のジャーナリスト、メディア研究者を招いて、報道の自由とジャーナリストの在り方

に関するシンポジウムを企画。プログラムを練り始めた1年以上前から、海外からのゲストには、カリフォルニア大学のD・ケイ教授、米国の「ジャーナリスト保護委員会」(CPJ)のメンバーらの参加を決めていたのだが、ケイ教授が国連人権理事会から特別報告者として、日本の「表現の自由」に関する調査を担当し、かつ、その報告書の公表時期が二転三転するという予想外のことが起こった。

結局、報告書の内容公表がシンポジウムの開催時期と重なったこともあり、当日はシンポジウムに先立って、ケイ教授が人権理事会に提出した報告書の概要説明と記者会見を行った。会見の開催は、シンポジウムでの議論が、この報告書のことには終始することを避ける意味もあった。

シンポジウムでは、第1部が「ジャーナリストが直面する危機とその保護」をテーマに、CPJ前代表のサンドラ・ロウ氏がキーノートスピーチに立ち、それを受けてパネリス

トであるAP通信のキャシー・ガノン氏、CPJのステイブン・バトラー氏、毎日新聞・伊藤芳明氏、共同通信・澤康臣氏がディスカッションを行った。コーディネーターは、植木安弘・上智大学教授が務めた。

続く第2部では「報道の自由とジャーナリズムの課題」をテーマに、ケイ教授がキーノートスピーチを務め、パネルディスカッションには、元ニューヨーク・タイムズ東京支局長のマーティン・ファクラー氏、インデックス・オン・センサーシップのデービッド・シュレジンジャー氏、CPJのキャサリン・キャロル氏、元朝日新聞ゼネラル・エディターの外岡秀俊氏、テレビ朝日・松原文枝氏が登壇。コーディネーターは、私が務めた。

## 世界に広がる「表現の自由」の危機

シンポジウムの内容を紹介する紙幅はないが、少しでも触れよう。第1部では近年、戦場でのジャーナリストが標的にされるケースの増加や、記者個人に対するサイバー・ハラスメントが、報道活動にもたらす影響といった議論などがなされた。

また、第2部についてはキーノートスピーチに立ったケイ教授の問題



スピーチするケイ教授(左)。右は筆者

提起について紹介しておきたい。

先に触れた通り、ケイ教授は当日、国連人権理事会に提出する報告書についての会見を行っている。キーノートスピーチでは、その背景にあるケイ教授の危機意識が表れていた。ケイ教授は今、世界的に「表現の自由」が危機的状況にあると分析。特に具体的な事例を挙げながら、「過激主義」ジャーナリズム」という認識が広まっており、そのなかで、政治権力のメディアへの関与が強まっていることへの憂慮を指摘。ジャーナリズムの独立性をどう担保していくかが肝要で、その方策として、個々のジャーナリストの連帯を訴えたのが、心に強く残った。

おと・よしひろ▼1961年生まれ 専門はメディア論 情報社会論 個人D会員

マイBOOK マイPR

■霊長類 消えゆく森の番人

井田 徹治（共同通信社編集委員）

ホモサピエンスの責任 環境問題をライフワークとする記者として、中南米、アジア、アフリカの森の中で、ユニークで美しい霊長類を数多く目にし、保護に取り組み研究者に出会った。

人間に最も近い生物種である霊長類の多くを絶滅の淵に追い詰めているのは「ホモサピエンス（賢いヒト）」を自認する人類の行いだ。「このままでは今世紀は霊長類大絶滅の時代になってしまう」。そんな危機感を込めて1冊の本を書いた。



岩波新書 1102円

■人民元の興亡 毛沢東・鄧小平・習近平が見た夢

吉岡 桂子（朝日新聞社編集委員バンコク駐在）

通貨と権力の150年史 建国のカリスマ毛沢東は、お札の「顔」になることを長く拒んでいた。そんな「記録」を見つけたことが、この本を書くきっかけになりました。虚実入り交じる史料と、記者として足を運んだ現場や当局者、歴史家への

取材を往復しながら、中国の国家建設の道のりをたどりました。

通貨は、国籍と国際の交差点でもあります。元と円の因縁は深く、復興を夢見る大国を追いかけるうち、日本を考えることになりました。



小学館 1944円

■トランプ後の世界秩序 激変する軍事・外交・経済

笹島 雅彦

（跡見学園女子大学教授・読売新聞出身）

政権発足直後の外交政策をメディア出身者らが徹底分析 パリ協定からの離脱表明など、トランプ大統領の暴走が止まらない。世界秩序を揺るがす「現状変更国家」は、中露だけでなく、トランプ政権下の米国も加わったのではないか。

そんな疑念を抱きながら、グループ研究の成果の一端をまとめた。前嶋和弘・上智大教授のほか、田村秀男・産経新聞特別記者、名越健郎・拓殖大教授、杉田弘毅・共同通信論説委員長らがそれぞれ、分担・執筆している。



東洋経済新報社 1620円

■正社員消滅

竹信三恵子（和光大学教授・朝日新聞出身）

「働き方改革」の実像に迫る 低賃金で不安定な非正社員の実態が知られるにつれ、正社員になりたがる若者が増えている。だがいま、過酷な長時間労働やリストラの横行で、正社員の安定や安心も有名無実化しつつある。非正社員の増加による「量の正社員消滅」と、正社員の働き方の劣化による「質としての正社員消滅」の2つの消滅だ。

問題は、国民の雇用を守るべき政府が、こうした正社員の劣化政策の旗を振っていることだ。「働き方改革」の実像が、ここにあり。



朝日新書 821円

■イタリア伯爵糸の町を往く

富澤 秀機（日本経済新聞社社員）

異人さんが有史以来初めて上州にやってきた 日本近代化の夜明け前（明治2年）、馬にまたがったイタリア人7人が中山道を北へ向かった。出迎えたのは前橋藩17万石の武士と警護の80人。

製糸場などを熱心に視察した一行は、不完全な道具で良質な生糸を生産する様子に驚きつつ、器械による大量生産の必要性も痛感。一行が横

浜へ戻った翌3年、前橋では日本で最初の器械製糸場が誕生。5年には富岡製糸場開設へとつながった経緯を明らかにする。



上毛新聞社 1296円

■絶家を思う

長宗我部友親（共同通信出身）

家系、先祖供養をどうするか 土佐の猛将といわれる、わが先祖の長宗我部元親は、土佐から発して、四国をほぼ統一した。その後、秀吉に攻められ、家康によって滅ぼされる。そのため徳川時代は、家名も使えず忍従の生活に耐え、大政奉還によって、ようやく家名を取り戻した。

だが、民主主義を基本とした現代、「家」というものに対する価値観は大きく変化した。家を継ぐものとして、今後いかに生きていくべきか。墓や先祖供養はその思い、悩みなどを綴った。



新講社 1512円

●会員の最新刊書をご紹介します

会員が出版された本を「マイBOOKマイPR」で紹介しています。200字程度で内容や狙いをおまとめください。お問い合わせは左記まで。担当…村田茜  
電話…03・3503・2729  
メール…muratea@jnpc.or.jp



第23期日本記者クラブ委員(2017・2018年度) (◎印委員長 役職は7月1日現在)

総務委員会

- ◎原田 亮介 日本経済新聞社専務執行役員論説委員長
西村 陽一 朝日新聞社常務取締役
小松 浩 毎日新聞社主筆
小林 毅 産経新聞社取締役(編集・論説・正論・知的財産担当)
深田 実 中日新聞社取締役論説担当
岩田 栄一 TBSテレビ報道局長
袴田 直希 日本テレビ放送網取締役執行役員
篠塚 浩 テレビ朝日取締役報道局長
岸本 一朗 フジテレビジョン専務取締役

企画委員会

- ◎西村 陽一 朝日新聞社
坪井ゆづる 朝日新聞社論説委員
上田 俊英 朝日新聞社編集委員
倉重 篤郎 毎日新聞社編集局専門編集委員
坂東 賢治 毎日新聞社論説室専門編集委員
福本 容子 毎日新聞社論説委員
橋本 五郎 読売新聞社特別編集委員
鶴原 徹也 読売新聞社編集委員
尾崎真理子 読売新聞社編集委員
実 哲也 日本経済新聞社上級論説委員

局編集委員

- 小川記代子 産経新聞社編集局副編集長
杉田 弘毅 共同通信社論説委員長
川上 高志 共同通信社論説副委員長
山田 恵資 時事通信社解説委員長
木村 仁 北海道新聞社東京編集局長
山本 勇二 中日新聞社東京本社論説室論説委員
瀬口 晴義 中日新聞社東京本社編集局次長兼社会部長
友安 潔 西日本新聞社東京支社長兼編集長
宮内 正英 スポーツニッポン新聞社編集主幹
島田 敏男 日本放送協会解説委員室解説副委員長
竹田 忠 日本放送協会解説委員室解説委員
山崎 登 日本放送協会解説委員室解説主幹
播摩 卓士 TBSテレビ報道局編集主幹
川戸 恵子 TBSテレビシニアコメンテーター
小栗 泉 日本テレビ放送網報道局政治部長
川村 晃司 テレビ朝日報道局コメンテーター
平井 文夫 フジテレビジョン報道局上席解説委員
福田 裕昭 テレビ東京執行役員報道局統括プロデューサー
ヴィーラント・ワーグナー 独シニピーゲル誌東京支局長

会報委員会

- ◎小林 毅 産経新聞社
梅原 季哉 朝日新聞社編成局長補佐
高橋 雅哉 共同通信社地域報道部長
吉岡 政道 河北新報社東京支社報道部長
勝沼 直子 神戸新聞社東京支社編集部長兼論説委員
草間 嘉幸 日本テレビ放送網報道局次長
仙石 伸也 日本新聞協会出版広報部長
大寺 廣幸 兼出版広報担当主管
小池 敏夫 日本民間放送連盟常勤顧問(TBSテレビ出身)
河野 博子 (読売新聞出身)
長友佐波子 (朝日新聞出身)

施設運営委員会

- ◎岩田 栄一 TBSテレビ
田村 喜信 日本経済新聞社東京本社総務局長
中橋 俊夫 中日新聞社東京本社総務局長
大久保嘉二 日本放送協会報道局専任局長
林 健一郎 テレビ朝日報道局報道業務部長
西野 文章 日本新聞協会事務局長兼総務部長
有木 靖人 日本プレスセンター常勤監査役
新実 慎八 (毎日新聞出身)

会員資格委員会

- ◎小松 浩 毎日新聞社
栗原健太郎 朝日新聞社ゼネラルマネージャー補佐
海保 真人 毎日新聞社論説委員
佐伯 聡士 読売新聞社編集局次長
越中 秀史 日本経済新聞社東京本社編

寄贈書

■崩れた原発「経済神話」 柏崎刈羽原発から再稼働を問う (新潟日報社原発問題特別取材班)



明石書店  
2160円

福島第1原発事故を受けて停止した原発の再稼働を求める声、リスクを負っているはずの原発立地地域から上がっています。背景に「再稼働によって地域経済が良くなる」との期待があります。それが根拠の乏しい「神話」であることを明らかにした連載企画を収録しました。

東京電力柏崎刈羽原発が立地する新潟県の柏崎刈羽地域に焦点を当て、地元企業に対する聞き取り調査や地域経済データの分析を行った結果を詳しく載せました。原発が地域経済にもたらす効果は限定的であることが具体的なデータによって示されています。

本書では他に、首都圏のための原発が新潟県に立地した歴史的背景、再稼働を求める地元経済界の事情などについても探りました。原発と立地地域との関係を考える上で、新たな視点を持っていただける内容になっています。

前田有樹 (新潟日報社報道部)

■富山市議はなぜ14人も辞めたのか 政務活動費の闇を追う (チューリップテレビ取材班)



岩波書店  
1944円

昨年10月、TBSテレビ『報道特集』のオンエアを見た岩波書店の編集者から、「ぜひ本にしたい」と依頼がありました。この取材の記録をなんとか残したいと思い、デスクや記者たちと執筆をすすめました。記者たちは、取材メモやニュース素材を何度も見直し、市議や行政とのやりとりを、極力そのまま伝えています。その息遣いや怒り、葛藤が伝わるように心がけました。

執筆中に市議が辞職し、本のタイトルを変更したり、原稿を大幅に修正するなど、校了まで気が抜けませんでした。本は、発売した翌週に富山県内の大手書店の週間総合ランキングで1位となりました。県民の政務活動費問題への関心の高さを改めて実感しています。真実を突き詰め、真摯に取材した記者たちの誇りがぎゅぎゅ詰まった本です。報道に携わる人たちの何かの手がかりになれば幸いです。

服部寿人 (チューリップテレビ報道制作局長)

情報発信

■特別展「ゴルゴ13」記者発表会

劇画「ゴルゴ13」が来年連載50周年を迎えることを記念した特別展が行われる。作者のさいとう・たかを氏らが出席し会見。会期・会場など詳細はオフィシャルサイト (<https://www.golgo-13.com/>) で。(6.7 会場場)

新しいOB会員

■大野 岩雄 (おの いわお) 1974年読売新聞入社。政治部次長、メディア戦略局データベース部長、読売映像代表取締役社長などを務め2010年退社。



日々のニュースの裏側には何があるのだろうかー当事者の肉声、息遣いに直接触れて、日本と世界の今後の動きをウオッチしたい。

■しまざわ ひろし 嶋沢 裕志 (しまざわ ひろし) 1981年日本経済新聞入社。静岡支局長、「日経グローバル」編集長、編集局長付編集委員などを務め2017年退社。



「世捨て人」になりたくても、これだけ世界情勢が混乱すれば、それも許されません。もっと世の中を解説せねば、と復帰しました。

■なか井 良則 (なかい らのり) 1975年毎日新聞入社。北米総局長、外信部長、論説副委員長を務め、2009年から日本記者クラブ。専務理事、顧問を務め2017年5月退職。



「ジャーナリズムの主要なジレンマは、自分は何がわかっていないか自分がわかっていないことだ」(ボブ・ウッドワード)。勉強し直します。

■会議報告

●第384回会報委員会 (6・8 小会議室)

7月号の編集について協議した。

出席 小林委員長、大辻、草間、勝沼、大寺、小池、河野、長友の各委員。

●第475回企画委員会 (6・14 10階Bホール)

第20回記者研修会 (8/7~8) と新潟取材団 (8/9) について担当委員が進捗状況を説明した後、今後のゲスト候補について検討した。

出席 西村委員長、坪井、上田、福本、尾崎、実、山崎 (浩)、今井、別府、小川、榊原、川上、山田、山本、瀬口、傍示、宮内、島田、竹田、山崎 (登)、川戸、播摩、小栗、川村、平井、福田、安井の各委員。

●第478回会員資格委員会 (6・14 小会議室)

7月1日付入退会を審議し理事会に答申した。

出席 小松委員長、栗原、越中、根本、井上、狐野、山本、神田の各委員。

●第227回施設運営委員会 (6・30 大会議室)

事務局から4~5月のアラスカ売り上げと貸室の利用状況を報告した。8月の貸室料金半額とお盆期間 (8/14~19) の短縮営業を決めた。

出席 岩田委員長、田村、中橋、林、有木、新実の各委員。

■広島イラン愛と平和の映画祭 記者発表会

毎年、広島のみで開催していたが今年は東京でも行う (8月8~10日、港区立男女平等参画センター)。イランの6作品と、アニメ「ジュノー」など広島原爆被害を題材にした2作品を上映する。(6.7 10階ホール)



**レストラン** \*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 文月懐石(8/4まで)

先付：穴子小袖寿司、サーモンアスパラ巻 お椀：鱧葛打ち 造り：三点盛り 焼物：鰯田楽焼き 煮物(冷やし)：夏野菜炊き合わせ 揚物：丸茄子ホワイトソース掛け 食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)  
(板長：大井由光)

洋食 おすすめコース(9/2まで)

夏野菜と蛸の香草風味サラダ仕立て、トウモロコシの冷製クリームスープ、ブラックアンガス牛リブロースステーキ、メロンとバニラアイスクリーム、パン、コーヒー付き(3,672円)。ランチ、ディナー(土曜はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。  
(シェフ：黒須修一)

**夏はクラブ利用がお得です**

毎年好評いただいている夏の会員向けの特別割引サービスを今年も行います。8月中はレストラン・アラスカがディナータイムの一般メニューを半額で提供します。ご家族や友人との会食にぜひご利用ください。このほか、クラブの部屋代割引、宴会プランの用意もあります。

アラスカ利用は03-3503-2766、貸室は03-3503-2724にお問い合わせください。

**開室時間変更のお知らせ**

お盆期間(8/14～19)はクラブ施設と事務局の開室時間を午後6時まで短縮します。9階和食レストランはランチタイムのみの営業です。10階レストラン・アラスカは夜も通常通りご利用いただけますが、19日(土)は休業します。

**HP更新情報** <http://www.jnpc.or.jp/>

**会見詳録** 会見の全文文字記録版

- 前川喜平・前文部科学事務次官(2017.6.23)
- 川村元気・映画プロデューサー・小説家  
「面白さの『発見』、組み合わせの『発明』」総会記念講演会(2017.5.29)
- \*6月末現在、750本の会見詳録を公開しています。

**音声アーカイブ**(日付は会見日)重要会見の音声録音

- コール独首相の会見を公開しています  
6月16日に87歳で死去したドイツのコール元首相は1983年11月、93年2月、96年11月の計3回、日本記者クラブで会見しています。このうち93年の会見での肉声を聴くことができます。
- \*6月末現在、120本の会見音声公開しています。

**クラブの電話 ダイヤルイン**

- 和食レストラン(9階).....☎3503-2723 ●会員事務.....☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階).....☎3503-2766 ●経 理.....☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ・☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み...☎3503-2722
- 受 付.....☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス...kaiken@jnpc.or.jp

**会員現況**

- 法人会員：134社 ●基本会員：747人 ●個人会員：1,257人
- 法人・個人賛助会員：62社・136人 ●特別賛助会員：102人
- 名誉・功労会員：11人 ●学生会員：119人 計：196社・2,372人

**囲碁同好会夏季大会**  
**山城さんが4年ぶり2度目の優勝**

恒例の夏季大会が6月24日(土)に開催されました。参加した15人が4局を戦い、スイス方式で順位を争いました。上手に(?)星を分け合ったため、全勝がなく3勝1敗が6人で、全ての対局が終わらなければ優勝者が決まらないという幹事泣かせの展開となりました。

主な順位は以下の通りです(敬称略)。

- ▷3勝1敗①山城孝夫②本田来介③中島勝④友田錫、吉川真澄⑥清水秀昭▷2勝2敗⑦牧野賢治⑧荒井忠男、鈴木隆敏⑩箱崎道朗、柴田鉄治⑫田川五郎

**山形から初夏の便り**

山形新聞社からさくらんぼをいただきました。毎年この時期、クラブに「旬の味」を届けていただいています。

「山形の名産を会員の皆さんでどうぞ」と大井祐一東京支社長。甘い初夏の便りはラウンジでも大好評でした。

**読み終わった新聞、雑誌は元の場所へ**

ラウンジ内書架の新聞・雑誌・書籍は自由に閲覧できます。読んだ後は元の場所に戻していただくようお願いいたします。

最新の雑誌を除く図書は貸し出しもいたします。ご希望の方は受付のフロアマネージャーにお申し出ください。

**<法人会員代表変更>**

- 産経新聞社  
飯塚浩彦代表取締役社長(旧・熊坂隆光氏)
- 下野新聞社  
岸本卓也代表取締役社長(旧・観堂義憲氏)
- 中央公論新社  
梅崎隆明取締役社長室長(旧・福士千恵子氏)
- テレビ東京  
小孫茂代表取締役社長(旧・高橋雄一氏)
- 朝日放送  
山田裕之取締役(旧・松田安啓氏)
- 福岡放送  
飯田政之取締役(報道・事業担当)(旧・毛利元夫氏)

**<訃報>**

坪井龍文会員(特別賛助会員、78歳)が6月8日死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

**会報委員会**

- 委員長=小林 毅
- 委員=梅原 季哉 大辻 一晃 大寺 廣幸  
勝沼 直子 草間 嘉幸 小池 敏夫  
河野 博子 仙石 伸也 長友佐波子  
吉岡 政道

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：佐々木 順一（毎日新聞社写真映像報道センター）



新記録の29連勝を達成し、報道陣に囲まれて対局を振り返る藤井聡太四段  
6月26日 東京都渋谷区の将棋会館で

## 異次元の14歳

時の人、将棋の藤井聡太四段である。昨年10月に史上最年少でプロ棋士となると、デビュー戦から負けなしで最多連勝記録を塗り替えた。

ワイドショーでは、対局の昼に何を食べたかといったことまで取り上げられる。毎回、大勢の報道陣が詰めかける。新記録を作る前に負けていれば、「過熱報道が余計なプレッシャーを与えたからだ」とマスメディアの責任を問う声が起きかねなかったが、この中学生棋士は、動じなかった。

思えば今年、フィギュアスケートの浅田真央選手が現役を引退し、プロゴルファーの宮里藍選手が今シーズン限りでの引退を表明した。2人とも10代から活躍し、世間の耳目を集めてきた。さらには、4歳の時から「天才卓球少女」として脚光を浴び続けてきた福原愛選手は、昨年の結婚以来、試合から遠ざかっている。

3人とも、スポットライトを力に変えたかのように世界トップレベルで活躍した。われわれは、彼女らの成長を見守り、親、祖父母の疑似体験をさせてもらった。

棋士道だけでなく、学業優秀で立ち居振る舞いもきちんとしている藤井君も、理想の「子」であり「孫」である。われわれは真央ちゃんと2人のアイちゃんの代わりをみつけたのだろうか。

さて、このミレニアル中学生は、コンピューター・ソフトを活用して力をつける一方、毎日、新聞を一面から熟読するそうである。

藤井四段の、自称「望外な」活躍は、デジタル世代の活字離れに悩む新聞業界にとっても、まさしく「儼然に巡り合った」かのごとく、なのである。

（秦野 るり子）